

症例 10 『子供が泣いている』と言う

- ・ J氏 78才. 男性
- ・ 特記すべき既往症はなし

主症状

症状〔1〕群 物忘れがひどい。

衣類をきちんと着ることができないときがある。

症状〔2〕群 夜、起きていて落ち着かない。

「地下鉄工事がそこまで進んできている」という。

「子供が床の下にいる」という。

生活歴

Jは不動産業で成功した。彼は妻と離婚が成立しないままに、愛する女性のところへ行って生活を始めた。30年位前のことである。

しかし、最近、その女性が胃癌であることがわかった。胃癌は手遅れの状態であった。彼女は認知症が始まったJの面倒を見られなくなった。

【メモ-1】

愛する女性との生活が始まってからは、別れてきた妻や子供たちとの付き合いはなかった。「はっきりとけじめをつけて下さい」との女性の言葉が、Jの行動をそうさせた。子供たちや元の妻に対する責任感や義務感は、Jの心に奥深く沈められた。

このような心の状態で人生を送るのでは、Jの認知症の出現は早まる。Jは、子供に優しい父親であったからである。

夜中に「子供が床の下にいる」という訴えの、床下の子供は、Jの子供を指している。Jにとっては、子供たちはいつまでたっても家に置いてきた当時のままの幼い子供たちである。当時から30年たった今、このような症状が出現するのは、愛する女性と生活を始めた頃から、Jが子供たちのことを心配していたということを示している。

『床の下』という状況は、子供たちに会いたいののに会えなくて、顔も見ることができなかったことを意味している。また、床の下の子供たちでは何もしてやれないのである。『可愛そうなことをした。申し訳ない』というJの苦しい気持ちが表されている。

「地下鉄工事がすぐそこまで来ている」というのは、床下にいる子供たちへ迫る、危険や不幸を意識するJの切羽詰った気持ちを表している。そのため、Jは眠れなくて不穏である。

「子供は床の下で何をしているのですか」と聞くと、「わからない、泣いている」とJは答えた。

泣いているのは、この30年間のJの心と、子供に対してのJの『存在価値』であろう。

【メモ-2】

愛した女性(胃癌により死亡)がいない淋しさと生活上の不便さにより、Jの認知症は急速に進行したと考えられる。

【まとめ】

子供を育てることに責任を果たさなかったことの『罪の意識』による症状である。